表面より続く

は急がしく、今から振り返ってみてそれぞれの寺の様子を思い起こす事は容易ではない。

稲葉家に、先祖が四国参りをした時の記録が残されている。それには寛保二年(西暦一七四二年)三月十一日在所打立川野市兵衛、同妻、下男、下女、僧二人の同行六人が五月二十六日に帰宅、七十六日、路銀五百目、道のり二百八十三里との記載がある。

今の様に車のない時代であり、二本の足だけが頼りで日数は今とは比較にならぬ程長くかかった。更にこの様に恵まれた旅はごく希であり、たいていは旅費の余裕も少なく、お接待をあてにし、善根宿にとめてもらって、雨、露をしのいだ様だ。今の様に遊山気分だけではとても回れなかった。巡拝者はそれぞれ深く心に決心するものを持って回った。一歩一歩に心を確かめ乍ら。途中接する人から受ける善意があって初めて出来る旅であり、大きな慈愛の中に自分がいる事を実感した事であろう。

今は大型バスが我々を寺の近くまで運んでくれる。本堂、大師堂の前で手を合わせてだけいれば次の寺へつれて行ってくれる。深く静かに祈る事は出来かねるのが現実だ。とは言え、中にはかなりの道のりを歩かねばならぬ寺もあり、白装束に身を固めて、右手に金剛杖を、左手には数珠を、首には袈裟をかけて回ればやはり平生の気持とは何かしら違って、いつものとげとげしい気分はなくなり、お互い励まし合っていたわり合って暖かい心をとり戻す事が出来る。参っている人の気持は遊山七分、信仰三分というのが本音かもしれない。だけど、だからと言って何もしないでいるよりは、それぞれの寺の持つ雰囲気にふれ、同行者との縁を持つ事で知らず知らずのうちに心の中に菩提心を引き起こしてくれているのである。あまり堅苦しいだけでは、物事は長続きしない。色々なものが混り合って初めて求めるものも得られるのである。他宗の寺からは真言宗は八十八ケ所参りがあるからうらやましいという事をよく聞く。

本山へのお参りだけでは満足しきれない部分もあるのだろうか。深い山中の寺、大海原を背景にした寺、雑踏の中の寺、手をかえ、品をかえて訪れる人を飽きさせず感化している。今年からは又、新たな四国巡りが始まる。多くの人がこの旅に参加されん事を祈ります。

四国八十八ケ所お砂踏 並に大護摩供養を 振り返って

一月十五日(成人の日)冬日午ら快晴の日に恵まれて約三百名の檀信徒の参加のもとに四国八十八ケ所霊場のお砂踏と大護摩供養が行なわれました。当日は十時より客殿内において主催者の密教婦人会々長の役重瑳禧子さんのあいさつ、住職の説明、ご詠歌奉納、おかんきの後、室内にしつらえられた四国八十八ケ所霊場の本尊の御影に手を合わせ、足では各札所の本堂の前のお砂を踏みしめて一番から八十八番まで願いをこめて回りました。

更にその後、本堂横の修行大師前にて大護摩供養が行なわれた。約七百本の護摩木に書き込まれた願いは火の中に投げ込まれ、炎となって天に登った。それから客殿に戻って福引が行なわれ、賑やかな一日であった。

思いつくままに

尾張　清水石野

それは丁度十年位前のことですが、主人が元気だった頃の事です。お正月前の或る日の十時頃でした。私は部屋の片づけをしていました。台所へ用事があっていったのです。ところが主人が大きなアルミの弁当箱へ、ジャーの御飯を一生懸命つめているのです。私はびっくりして「それ誰の弁当箱」と問いました。すると主人は玄関の方を指さしながら「今、玄関へ男の人が来て、腹がへって歩けんからこの弁当箱へ飯を入れてくれ、おかずは塩でもなんでもよいからと言うから、可愛そうに思って、おかずは今漬物しかないけど御飯ならあるからと言って、今つめてやっているんだ」と申します。成程玄関をのぞいて見ると、ひげむじゃらな元気そうな若い男がまっていました。働けば働ける体をしているのに、人をたよりに御飯をもらって歩くとは、私は腹が立ってきました。そして、だまって二人の会話を聞いていました。主人はその男の人に「あんたは体は元気そうじゃないか、何か仕事をみつけて働かんといけんぞ、結構な若い者が御飯をもらって歩く様じゃいけんぞ、頑張らんとな」と言って弁当箱を渡してやりました。その男は「どうもすみません、有難う〳〵」と言って帰って行きました。その後で私は、でも可愛そうな人だなと、ちょっぴり哀れになりました。主人は「たとえルンペンでも食べる物がなくては可愛そうじゃ人間は食い虫だからな、助けてやらねば」と一人言を言っていました。その言葉に、あ、主人は優しいんだなと、自分が恥かしくなりました。もし、私が玄関へ出ていたら追返す位の事しか出来なかったろうと、自分の薄情さに気付きました。時折、その人のこと思い出して、今は仕事しているだろうか、どうしているかしらと気に掛っています。只今は主人も霊界にゆき、三年の月日が過ぎました。きっと霊界から、私の小さい心を笑っている事でしょう。それ以後私は、どんな人にも親切にしてあげようと心掛けています。そして、朝起きたら必ずお仏壇のお花の水を取替え、お茶をお供えしてお経を唱え、供養をしています。また、お寺さまよりいただいた家庭信条を読ませていただき、心の修養につとめています。お経の方も、私は里が黒住教だったものですから、ほんの少ししか知らなかったのですが、主人の没後は一生懸命覚えて供養してあげねばと思い、朝夕お祈りして全部覚える事が出来ました。おかげで、やっと一人前になったかなと言う感じです。又、私は足腰が痛くて歩行困難で、杖をついてやっと歩ける状態です。でも有難いことに、自分の事は自分で出来るし、どうにか留守番もしています。そして、やさしい家族と共に毎日を楽しく過しています。

これも、お大師様や御先祖様の御守護があればこそと、感謝致して居ります。そして、この平成の御代の名の如く、世界の平和と人類の幸福を願って、毎日を有難い〳〵の心で過させていたゞいています。

喜捨すれば我が心にも春が来る　合掌

ご詠歌

○平成二年九月十一日　高野山に於て
第六十二回高野山金剛講全国奉詠大会選抜部門に於て、団体教導之部総本部教師会長賞を戴く。(小川良子・水野幸子・若松美智子)

○平成二年十一月二十六・二十七日　岡山湯迫温泉・白雲閣に於て
高野山金剛講中国地方奉詠大会(参加人員六百名)に於て、教師団体之部優勝(小川良子・水野幸子・若松美智子)。同じく三位(金塚敦子・川野昭子)

西部観音堂と市場薬師堂について

敷井　川野多喜夫

冬の日、観音堂や薬師堂に朝の光がさしこむのは七時半か八時頃であろう。この頃になると各地区のお婆さんの多くは、数珠、線香を手に、毎日お友達に会える楽しみも加わり各堂へ登る登り道をいそいそと登って行く。今も昔も変らぬ光景であろう。

西部観音堂の四百年程前はこの位置に、こじんまりとした小寺があり、坊さんも住み、寺名を龍光山海蔵寺と呼び、牛窓本蓮寺と同じ日蓮宗寺であった。今から三百三十年程前備前藩主池田光政は、領地内に寺が多過ぎる事から、寺領を取りあげる廃寺令を出した。

この時、尻海村海蔵寺も廃寺になり、寺は打ちこわし、住僧は僧籍を離れ、他の職業につく様、勧められた。尻海村に於ては当時板子一枚下は海の底と言う廻船業家が多かった関係から、他村の様に御本尊を焼き捨てる事もならず、小堂を造り御本尊は在家の人々によって守られた。現在安置されている脹よかな正観音像は、この時の尻海を知っている事であろう。

一方、市場薬師堂は「昔・成就坊と言う僧が薬師堂を背負い尻海を尋ね、御堂山に一堂を開き、東向山薬師堂と名付けた。僧は晩年生きた身で御入室なった。俗名宇津木兵衛藤原景衛といった」と伝える。

按ずるに、寛文六年(一六六六)福岡村(長船町福岡)天台宗成就院廃寺。佐井田村に宇津木姓の旧家あり。こう考える時、薬師堂開基の口伝が解ける。時は流れ今から二百三十年程前、尻海の戸数も五百軒・千石船の数も百二十艘を数えた全盛期、「尻海庵とゆう朝日寺の新屋庵之、高弟恵仁を年内に引越し願ったが、病気で引越出来ない。そこで秀円をお願いします。支度金はお受取下さったであろう、又尻海庵の積立金銀百四十五円二分(三両)は積立済です」とゆう庄屋谷惣七郎の古文書が残っている。この尻海庵は薬師堂境内にあった平家で、部落の集会所に使用していた建物がこれである。江戸期、廻船業には舟番所に提出する廻船手形が必要であった。

この廻船手形に宗門証明が書きこまれる関係で檀那寺の印が必要で、近所に出張寺があると便利な為、尻海庵が生まれたのであろう。

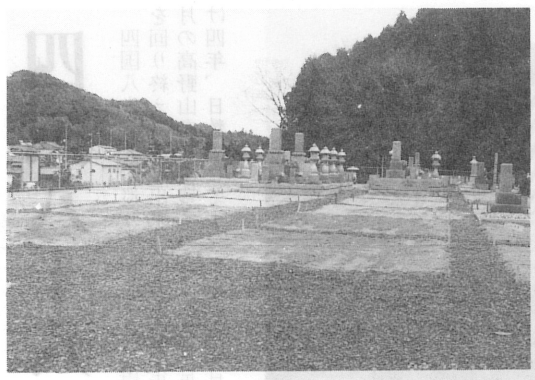
以後百年、明治を迎える迄続いた様である。

墓地、残りわずか

朝日寺を真近に望み、車で乗りつけられる便利な場所にあり、ゆったりした区画で費用も安い為、段々区画がうまり、あと数区画で墓地全体がうまってしまいます。今は必要ないという人もいつかは必要になる墓地です。

いざという時に困らない様に早目に申し込んで下さい。費用は次の通りです。

一区画3m×3m(九平米)三十六万円
管理費　月　三百円



歌三首

問口　山田武雄

四国路をここに収めてお砂ふみ
偲べばはるかいつ年の旅

目裏に御影うかべお砂ふむ
幾山河や一杖の旅

松葉杖供えて帰る満願寺

十三仏巡り

十二、大日如来

真言宗の本尊である。朝日寺にも客殿の本尊さまとしてまっています。他のすべての仏はこの大日如来の持つ徳の一つづつを分け持っている。万徳をそなえた仏様である。大きな日と書く様に太陽がすべてのものを照らして育てるごとく、あらゆるものをはぐくんで生命を与えている究極の存在である。学校でいえば校長先生の様な存在があまりにえらくて特徴がないので一般の人々からは、お地蔵さんや観音さんの様に親しみにくい。しかしお地蔵さんや観音さんへの信仰が深まっていけば自然に大日如来への信仰につながるとするのが真言宗の教えである。

総代会役員

(◎総代長　○副総代長)
三浦謹次　○森下　繁
庄田　千種司郎
渡内　市守用二
高助　岩田博志
大土井　児玉正一
西部　◎島岡　篤
市場　川野澄男
中東　松井金次郎
大東　○川野忠義
敷井　種草立司
尾張　内田　侊
下寺　山田克己
問口　内田栄光
前泊　内田長次郎
虫明　山本清四郎
河原久雄
藤本太郎
坂口鶴一
心光正美
川野健郎
松下　隆
久本太郎

密教婦人会役員

(◎会長　○副会長　△会計)
庄田　△木村須美子
渡内　千種友江
高助　◎山本喜世子
大土井　鷹取幸子
西部　松井花津枝
市場　川野文子
中東　武久安子
大東　○松井清香
敷井　川野美津子
尾張　八塚よね
下寺　○内田君香
久本節子
問口　久本和子
前泊　内田耕恵
児玉笑子
谷　美代子
坂口澄江
西岡　栄
川野昭子
川野末子
出井愛子
久本治子